東京発ーふるさとへ

追い続けてきた父の背中
「今見据えるのは故郷の再生」

タナベエステート株式会社
代表取締役

田辺和喜さん(47)

福知山高校出身

福知山市報恩寺出身。今は統廃合で閉校になった佐賀小学校に通った。日新中学校、福知山高校を卒業後、埼玉県の大学に進学。故郷を離れて30年経った今もなお、あの里山が大好きだと語る。とりわけ思い出すのは烏ケ岳と鬼ケ城だ。

「中学2年の頃からバイクで山道を走るモトクロス競技を始め、高校の時にはロードレースの大会に出始めました。父親が自動車メーカーの整備士だったので、車にバイクを積んで二人三脚で関西圏の大会をまわっていました」。青春はバイク一筋、アルバイトとバイクの練習の毎日で「大学生らしい遊びをした記憶もない」と笑う。

大学4年時にロードレーサーへの登竜門といわれている全国大会で2位になり、卒業後には名門チームから声がかかり、念願だったレーサーの道へ進んだ。そんな矢先にレースでけがをし、バイクの道をあきらめることに。失意の中で思い出したのが父の背中。整備士から営業販売になった父は、創意工夫で目覚ましい成績をあげていた。自分も営業の仕事をしようと決めた。

「27歳のときに、縁があった大手不動産会社に入りました。右も左も分からないような新人営業だったので、最初の数年は営業所に寝袋を持ち込んで仕事をするような状況でしたね。自分は人より遅れていたので、努力するのは当たり前。常にそう思っていました」

バイクの世界で成功できなかった悔しさをバネに、仲間に追いつけ追い越せで、がむしゃらに取り組んだ。その努力が実を結び、入社4年目には営業成績で全社トップになった。「当時、営業マンは4千人ほどいたのですが、継続しないと意味がないと思い、そこから5年間、トップを取り続けました」

その後、営業所の所長を経て、東京で独立することに。「これまで培ってきたノウハウに加えて、もっとお客様の要望に寄り添えるノンストップのサービスを提供したい」という思いで起業した。不動産仲介業務だけでなく、買い取り再販事業やリノベーションなども自社の中で提供できるような会社だ。

仕事にまい進する支えとなった父は、頑固で厳しかった。だが、バイクでがんばっていたときも人生で迷ったときも、いつも「がんばれー、がんばれー」と言ってくれた。

「父は敏腕営業マンでした。性能の良い車を持っている会社でも、軒並み父のメーカーの車に替えるんです。どうやって営業しているの?と聞いたら、『俺は物を売っているのではない。人に信用してもらい、自分を買ってもらっている。人間が介在しているものだから、自分自身が常に成長していなければならないし、魅力的な人間でないといけない』と。父からは本当にたくさんのことを学びました」

これから先に見据える思いがある。

起業前のこと。埼玉県の営業所で東日本大震災に遭い、会社から物資の配給を受けた。そこに、今は閉業してしまった地元報恩寺のタケノコ工場から出荷された缶詰が入っていた。

「いつの日か、あの土地を生かした再開発をしたいんです。佐賀小学校が足立音衛門さんの里山ファクトリーとして活用されているように、今は使われていない土地や不動産を有効活用して、地域に根付いた町おこしに貢献できないかなと考えています」

タナベリゾートというもう一つの会社を作って、今後は京都や丹後のブランドを生かした古民家再生なども視野に入れている。

「バイクの競技をしていたとき、父に見せたいと、夢に描いていた景色がありました。鈴鹿サーキットの最終コーナーをトップで駆け抜けてくるところです」。それは見せられなかったが、父には今の仕事で活躍するところをまだまだ見せたい。だから「絶対長生きしてほしい」。今一番の願いだ。

嘱託記者
三浦麻衣子